



TITLE:

<図書紹介>陳荊和,『十六世紀之菲律賓華僑』,新亜研究所東南亜研究室(東南亜研究専刊之二),香港,1963年,vii+161p.

AUTHOR(S):

藤原,利一郎

CITATION:

藤原,利一郎. <図書紹介>陳荊和,『十六世紀之菲律賓華僑』,新亜研究所東南亜研究室(東南亜研究専刊之二),香港,1963年,vii+161p.. 東南アジア研究 1964, 1(4): 105-106

ISSUE DATE:

1964

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54863>

RIGHT:

もちうるか否か、ここに基本的な問題があるのではなからうか。ビルマ、インドネシアの両国の現実は、わたくしのこの疑問を裏づけはしないだろうか。

(本岡 武)

Clifford Geertz: *Agricultural Involution, The Processes of Ecological Change in Indonesia*. University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1963. xx+176p.

近年 C. Geertz の意欲的な労作が次々に公表されているが、彼が1956年に謄写刷りの形で発表した *The Development of the Javanese Economy: A Socio-Cultural Approach*. (The Center for International Studies, MIT.) は、かなり長い力作でありながらも出版されなかった。この書物は、歴史概説、生態学的適応の様式、権威体系、都市化、観念体系の五つの部分から構成されている。この内の最初の部分が enlarge されて出版されたものが本書である。

題名の中の Involution とは、人類学者 A. Goldenweiser が最初に用いた用語で、一定の形式が安定化又は他の新しい形式に変形することに失敗し、内容的により複雑化し続けるような文化現象を意味する。Geertz は、この概念をジャワの零細農業の在り方に適用して、その社会経済史的背景とそれが今後のインドネシア経済に持つ意味を本書において論及する。

Geertz によれば、インドネシアには二つの伝統的な生態学的体系 (ecosystem) が存在する。即ち、焼畑的な swidden 農業と水田稲作の sawah 農業を中心とする二体系である。前者は、より多く自然の条件に依存し、主に外領地域と西南ジャワに分布している。後者は、人為的条件に依存する度合いが強く、主にジャワ、バリ島、西ロンボック島に分布している。Geertz は、この二つの ecosystem の相違を歴史的に考察する。

オランダの植民地政策の基本原理は、経済に関する限り、終始、植民地の経済構造を根本的に変形させずに農産物を世界市場に持ち出すことであった。この目標達成に三つの方式が歴史上用いられている。東印度会社、栽培制度とプランテーション制度である。特にジャワを中心とした栽培制度は、上記二つの ecosystem

の対照を際立たせる素因となったばかりではなく、インドネシア経済の二重構造 (the capital-intensive Western sector and the labor-intensive Eastern sector) を確立することになった。swidden 地域ではコーヒーが、sawah 地域では砂糖が、輸出農産物として栽培を強化された。人口増加や生産方法の発展は、この二地域の区分を社会的にも顕著なものとした。swidden 地域では、無産化が進行すると共に、農業生産物は専門化し、個人主義的傾向が強まったが、sawah 地域では、involution が深化して、土地の使用・保有法、共同生活、宗教までも、この傾向を反映して、貧困は分有された。

インドネシア農民が急増した人口を吸収する適当な場を持たなかったこと、そして、現に持たないことが、インドネシア農業の生産性に致命的であることを Geertz は、さまざまな角度から分析する。しかし、本書のオリジナル・プランが、先きに触れたように、社会や文化の側面を含むものであるため、未だ総てが論じ尽されていない感があり、残余の部分の出版が待望される。

(口羽益生)

陳荆和：『十六世紀之菲律賓華僑』新亞研究所東南亞研究室（東南亞研究專刊之二）。香港。1963年。vii+161p.

東南アジア華僑に関する論著は数多いが、現状の分析、考察を主としたものが大部分で、歴史研究に重点をおいたものは甚だ乏しい。しかし現状の考察に資し、将来を推測する手がかりを与える点で歴史研究が重要なことはいうまでもなく、かかる意味で本書のごときを得たことは喜ばしい。

著者はかつて日本に学んだことのある人で、元国立台湾大学助教授、現在香港にある新亞学院の歴史学教授をつとめ、東南アジア史の研究では目下最も活躍している中国人学者の一人である。ベトナム史に関する論考や、史料の解説、紹介が多いが、本書は氏がかつてフィリピン華僑に関して諸雑誌に発表した論考を補訂、集成したものである。

スペインによるフィリピンの植民地化はフィリピン華僑史の上において画期的重要事件であった。これを契機として華商のマニラ貿易が発展し、華僑の著しい増加をみた。しかしこれはやがて、在フィリピンのスペイン人に華僑に対する恐怖と警戒心を生ぜしめた。

この間に起こったのが海賊林鳳のマニラ襲撃事件である。かくて植民地政庁も当初の華商誘致をはかる寛大な方針を改めて、その抑制と圧迫につとめることになった。本書はこの間の諸事実についてスペイン側史料と中国史料の双方を用いて克明に論述しており、従来の研究に一步を進めたものといえることができる。

内容は本論4章と附録1より成り、第一章「西班牙之領属菲律賓」では、レガスピのマニラ占拠までのスペインとフィリピンとの関係、この期間における華商のフィリピン諸島における貿易活動について述べ、併せてマニラ占拠後におけるその貿易の発展と、スペインの植民地経営上における貢献について説いている。第二章「中国海盜之寇擾」では、林鳳のマニラ襲撃事件の顛末と、その直後における中国・フィリピン間の官民交渉について述べ、これらが中国や中国人に対するスペイン人の恐怖と警戒心を惹起させる原因となったことを説く。第三章「華僑管制政策之開端」は華僑に対する三分税の創設と、マニラ華僑の居留地としてのパリアン設置について述べたもので、なお当時のマニラを舞台とする中菲貿易の繁栄と同地華僑の増加、華僑に対するスペイン側のキリスト教伝導工作、パリアン内部の状況についても記している。第四章「十六世紀末年之菲律賓」は16世紀末のフィリピンの内憂外患と、この期における当局の対華僑政策について述べたもので、華僑の華布着用禁止令などの華僑圧迫策の実施、さらに華僑潘和五の叛乱事件と、その後における華僑の帰国強制などの華僑圧迫の強化について詳細に説明している。なお附録は「菲律賓華僑史的人口及居留地」と題し、1570年より1947年までの間のフィリピン華僑人口の動態、居留地の変遷に関して諸文献より得た資料を年代順に列記したものである。

要するに本書は表題の16世紀のフィリピン華僑の研究としてはすぐれたものであるが、フィリピン華僑史の上で重要な17世紀以後には及んでおらず、この点甚だ惜まれる。続編の出現を期待する次第である。なお著者は記していないが、Blair and Robertson: *The Philippine Islands*. 55v. の中から華僑史料を抽出列挙した呉景宏氏の『西班牙時代之菲律賓華僑史料』(南洋研究, 第1巻, 1959). が出ており、フィリピン華僑史研究に頗る便利であるので附記しておく。

(藤原利一郎)

Thai-English Student's Dictionary. Compiled by Mary R. Haas, with the assistance of George V. Grekoff, Ruchira C. Mendiones, Waiwit Buddhari, Joseph R. Cooke, Soren C. Egerod. Stanford University Press, Stanford, California. 1964. xx+638p.

この辞典は現在手にし得るタイ語の辞典として最も新しいものであると同時に、最もすぐれたものだといえるであろう。ここでいう「すぐれた」というのは、単に語の意味や品詞がわかるというだけでなく、その単語の用いられ方、あるいはタイ語の中での動きかたがよく解るということである。この事は、タイ語を母国語としない我々にとって、特に有難いことである。こういった意味で、タイ語を習い始めたばかりの人達にとっても、またそれを専門的に研究している人達にとっても、本書は非常に有用である。本書をこの様な有用な辞典としている要因として次の様な点をあげることが出来るであろう。

① 徹底した音素表記が用いられていること。従来のタイ語辞典は、それが英語を母国語とする人達を対象にするものであれば、英語の正書法にもとづく表記法を用いていた。これに対し本書では、誰にでも容易に理解出来る音素表記を用いている。この表記法は、同じ著者による *The Thai System of Writing*. Washington D. C., 1956. のそれと原則的には同じであるが、stress 及び intonation が表記されている点で、本書の方が更にすぐれているといえる。stress については、例えば、/phaasǎa/ 《言語》における第一音節 /phaa/ は、実際の会話ではしばしば弱められて [phə] となるが、第二音節の /sǎa/ は常に上昇型のトーンで発音される。すなわち /sǎa/ は "stressed syllable" である。この様な "stressed syllable" はいつも /' / でもって明記されている。また intonation は三つの型に分類されて、それぞれ ↑, →, ↓ でもって表記されている。更に綴字と発音とが余りにかけ離れている場合には * を符して注意をうながしている。以上の様な配慮がはらわれている点から、本書の表記によれば、実際の発音をかなり正確に知ることが出来るであろう。

② 必要に応じて単語の "level" が示されている。例えば、《to eat》を意味する最も一般的な形 /kin/ は "common" であり、これに対して /dɛɛg/ は、